



# 子ども樹木博士 ニュース

2013 - 9

No. 52

子ども樹木博士認定活動推進協議会

## 巻頭言



## より身近な 子ども樹木博士を目指して



子ども樹木博士認定活動推進協議会 会長 井上 公基(日本大学生物資源科学部 教授)

私たちは、これまでに神奈川県内を中心に小学校を対象とした子ども樹木博士を実施してきており、今年7月に実施した子ども樹木博士で認定証授与者数が1万人を超えました。

ゆとり教育を支える「総合の学習」の一環として、多くの小学校の教育現場を対象に学校側の意見を取り入れながら子ども樹木博士を実施してきたことが、多くの認定数につながったものと思います。

平成 23 年度より、公立小学校の「総合の学習」の授業時間が年間 105 時間から 70 時間へ短縮されましたが、引き続き多くの小学校で環境教育として、子ども樹木博士の実施が求められています。

授業内外を問わず実施される子ども樹木博士は、樹木を観察することから始まり、身近な自然へ触れることにより、自然へ興味をわかせます。植物の生態や自然科学についての観察と解説の実施は、今後も益々重要な役割を果たすものと思います。

子ども樹木博士の推進母体となっている子ども樹木博士認定活動推進協議会（以下「協議会」という。）自体は、直接子ども樹木博士を実施するものではなく、認定基準の提示や各種資料の提供を行ったり、実施状況の取りまとめなどが重要な役割となっています。

全国津々浦々で実施される子ども樹木博士の実施団体は全国に広がり、その数は相当数に上っています。

しかし、このような実施団体の実施結果の報告は、実施団体からの自発的なものであり、すべては網羅されていません。これらの実施結果の報告は、実施団体が工夫し、それぞれの団体のホームページ（HP）やブログ等に公開されています。したがって、これらの情報を協議会が共有することによってネットワーク構築の基礎に繋がります。子ども樹木博士に関する情報を一つにまとめるには大変困難な面もありますが、HP やブログ等多くのインターネット環境を活用することが活動の推進に直結します。

一方で、協議会から発信される子ども樹木博士ニュースの閲覧者は、正確な情報と完成度の高い、有益な情報を求めます。これらの情報を必要とする閲覧者を増やすには、協議会と実施団体との連携により、HP 環境を充実させる必要があります。この具体的な方法の一つとして協議会は、実施団体に対してリンクを貼る URL アドレスをメール送信してもらうことにより、正確な情報を提供できます。必要があれば、実施結果報告用の簡便なフォームの掲載などがあるとよいでしょうし、実施団体に任せることも必要でしょう。協議会の HP のリンクの部分工夫することにより、閲覧者増に繋がります。このような取り組みを進めることも今後の子ども樹木博士をより活発にするものと思います。

## 【目次】

巻頭言	より身近な子ども樹木博士を目指して	子ども樹木博士認定活動推進協議会 会長	井上 公基… 1
特集 I	涼しい森の中で、小さなコケの森を観察	一般財団法人自然環境研究センター研究員	吉村 妙子… 2
特集 II	季を見て森を見る楽しみ（四季折々の森から）—その② 秋の森—	森林インストラクター	小菅 智彦… 3
事例報告 I	「子ども樹木博士」認定事業	千葉県森林インストラクター会 事務局長	栗田 吉治… 4
事例報告 II	札幌市・藻岩山での子ども樹木博士活動	株式会社りんゆう観光	立野 祐一… 5
シリーズ	東南アジアの木々たち (21) —真っ黒い石のような木—	自然と植物の観察会 TREECIRCLE	梅本 浩史… 6
子ども樹木博士質問コーナー	茨城県植物園緑のインタープリター・森林インストラクター		堀内 孝雄… 7
事務局だより	第 13 回通常総会の開催について（報告）		8

特集Ⅰ



# 涼しい森の中で、 小さなコケの森を観察



一般財団法人自然環境研究センター研究員(森林インストラクター) 吉村 妙子

今年の夏も各地で猛暑が続きました。そのような日は木陰の涼しさがとりわけありがたく、歩くときにも街路樹の陰を選んでしまいます。森には、夏季には周りよりも気温を下げ、気候を穏やかに保つ機能があると言われていますが、ちょっとした樹林でもそれが感じられます。

森の中でも、沢などの水環境があると気温や湿度の違いがいっそう際立つようで、いつもの観察フィールドでも沢沿いの道に入ったとたんに空気がひんやりします。こうした湿度、温度の違いに伴って、見られる植物の種類構成も変わってきます。先日の定例観察会では、その少し前に博物館へコケの企画展に行ってきたので、樹木や草花に加えて普段は見過ごしていたコケがいつも以上に気になりました。すると、立木の根元付近の地面から樹皮までスギゴケに覆われていたり、倒木に生えているコケも一種類ではなかったりと、新しい発見がたくさんです。これまで見逃していたものが随分あったことに気づいて少しだけ反省しつつ、まだまだ観たいものが増えたことに嬉しくなりました。樹皮にはコケだけでなく色とりどりの「地衣類」も生えていて、美しい模様を描いています。地衣類はコケ類と同じような場所に出現することもあり、まとめて「コケ」と呼んでしまいがちですが、生物学的には別物で、藻類と菌類が共生した生物ということです。こちらも面白そうで、いずれもっとよく観察してみたいものです。



切り株の上のスギゴケ、スギの実生、キノコ

コケといえば、スギの枝葉のような形のスギゴケ、平べったい葉のようなゼニゴケがすぐ思い浮かびます。コケは分類学的には「陸上に住む植物の中で、胞子で増え、維管束を持たない植物」のことで、大きく3つのグループに分けられるとのこと。スギゴケなどの「蘚類」が最も種類が多く、ゼニゴケなどの「苔類」、そして最も種類の少ない「ツノゴケ類」というグループがあり、大きな違いは「胞子体」と呼ばれる胞子を作る部分だそうです。スギゴケの胞子体は枝の先から伸びた細い柄とその先端に付いた器で、ゼニゴケではパラソルの傘の部分に胞子体ができます。ちなみにツノゴケ類の胞子体はツノのような形だそうです。全体的な形で何となく「スギゴケ」、「ゼニゴケ」と言っていました。しっかり観察すると体のつくりが見えて面白いです。

沢沿いのさらに水気の多い場所にはミズゴケが見られたり、小さな滝で常に水しぶきが当たるような岩にゼニゴケが張りつき、その周りの地面にはスギゴケが生えているなど、ちょっとした環境の違いによってコケもすみ分けているようです。維管束を持たない植物なので、住みやすい場所を選んで全身で水の出し入れをするという、ある意味単純な暮らしをしているのでしょう。種名はまだ覚えられていませんが、生える環境を推測しながら同定ができたら面白そうです。世界で約400種、日本では17種が確認されているというツノゴケ類も観たくなってきました。

写真は、切り株にスギゴケ、スギの実生、それにキノコが生えていて、まるで小さな森のような美しい風景に見えて撮影したものです。人間が森の気候緩和機能の恩恵を受けているように、クマムシやダニなどの小さな動物たちにとっては、実際にコケの中は温度・湿度が穏やかに保たれた住みやすい森なのかもしれません。

(参考文献)

ミュージアムパーク茨城県自然博物館編「第57回企画展  
こけティッシュ 苔ワールド!—ミクロの森に魅せられて—」

(2013年3月16日発行)

## 特集Ⅱ

## 季を見て森を見る楽しみ（四季折々の森から）

## —その② 秋の森—



森林インストラクター 小菅 智彦

秋の森は自然の恩恵に溢れ、森で暮らす動物たちにとっても私たちにとっても恵みの季節となります。また同時に、移動できない樹木にとっては、種子によって自分たちの勢力範囲を維持拡大する重要な季節でもあります。秋の“子ども樹木博士”では樹木の識別に加えて、種子散布の視点から樹木の生存戦略に興味をつなげていきます。

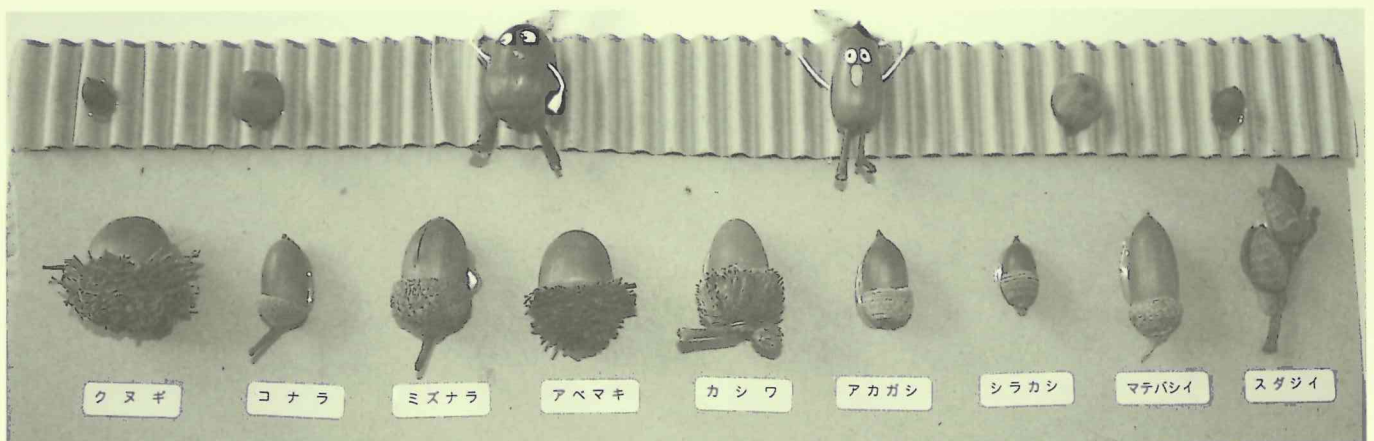
まず、種子を散布するために“鳥”を利用しようと考えたグループがあります。しかし、鳥もただでは運んでくれません。そこで樹木は、運搬の報酬として食料を与える作戦に出ます。鳥は果実を食べることで空腹を満たしますが、その中の種子は胃の中でも消化されずに残るため、後で糞と一緒に排泄されて移動が実現します。よりたくさん種子を運んでもらうためには、鳥にとって果実が見つけやすく食べやすいこと、つまり目立つ色であること、ひと口サイズであることが条件になります。モチノキ、ガマズミ、イイギリなど、このグループの果実が赤く熟し、鳥の口に収まるサイズになっているのはそのためです。

次に、散布に“風”を利用しようと考えたグループがあります。こちらは、目立つことよりも風に運ばれることが優先されます。色は地味なのに形がユニークな果実が多く、プロペラ状のカエデ、ハングライダー状のシナノキ、風船状のアオギリ、円盤状のアキニレなど、その形状は実に様々。共通しているのは、どれも翼果や果皮や苞片などのパーツを利用して、種子を風に乗せるための仕掛けを工夫している点です。また、アカマツやクロマツのように、松ぼっくりを構成する鱗片（種鱗）を天候や湿度に合わせて開閉させること

で種子の飛行調整をする高度な技術を持った樹木もこのグループです。

その他にも、川や潮の流れを利用しようと考えたグループ、ヒッチハイカーのように動物に付着させて運ぶことを考えたグループ、自ら弾けてその勢いで種子を飛ばすことを考えたグループなど、散布のアイデアは様々ですが、何といたっても子供たちに人気があるのは、コナラ、クヌギ、カシなどブナ科の樹木に代表されるドングリのグループです。この仲間は、他の樹種よりも早く成長して森を優占的に支配しようというよりは、ゆっくり成長して最後に森を支配できればいいとする大器晩成型の樹種が多く、種子もあまり遠くまで散布することを考えていません。その分、重量感のある大きな実（堅果）をつけるので、栄養価の高い食料源として森の動物たちにも大人気です。そこで、森に棲むリスやネズミは、このご馳走をライバルに奪われる前に冬に備えて隠しておこうと考えます。しかし、すべての貯蔵場所を覚えておくことができません。ブナ科の樹木にとっては、重力で自然落下したドングリや、森の動物たちが食べ忘れたドングリが発芽して育ってくれば目的は達成。後は自分の目の届く範囲でじっくりとその成長を見守っていくのです。

このように種子散布の方法がバラエティに富んでいるということは、樹木が移動すること、すなわち勢力範囲を広げて子孫を残すことに執着し、周到的な戦略を考えていることの証でもあります。皆さんも実りの森の中で、おおいに木を観て森を観て、子供たちにその魅力を伝えていただけたら幸いです。



ドングリの仲間たち



## 「子ども樹木博士」認定事業



千葉県森林インストラクター会 事務局長 栗田 吉治

千葉県森林インストラクター会、通称 FIC（フイック）の「子ども樹木博士」認定事業は、平成 14 年 8 月に君津市久留里城山国有林において初めて開催され、これまでに千葉市、船橋市、松戸市などにおいて例年実施してまいりました。当会の「子ども樹木博士」の取組みは、基本的に日本樹木医会千葉県支部との協働事業として、それにそれぞれの開催場所の市当局、また場所により関東森林管理局千葉森林管理事務所の共催を得て行っています。

今回は、5 月 3 日に行いました松戸市 21 世紀の森と広場「子ども樹木博士」の事例を報告いたします。今年で 5 回目となる当事業は、これまでは毎年、子どもたちの夏休み時期の 7 月末に実施してまいりましたが、今回は 5 月の連休行事の「こども祭り」の一環として行われました。回を重ねるごと松戸市の公式行事の一端に組み込まれるほどになったことは嬉しい限りです。

当日は、さわやかな五月晴れのもと、事前に申し込みを受けた小学生 16 名とその父母 6 名の合計 22 名の参加者を迎え、高学年組（4 年生～6 年生）1 組、低学年組（1 年生～3 年生）3 組の 4 組を編成してスタートしました。これまでは参加者を子どもたちのみとしていましたが、今回は募集案内で親子での参加を呼びかけたため、父母 6 名のうち 4 名が子どもたちと一緒に試験にチャレンジしました。

当事業では、できるだけ楽しみながら、かつある程度の達成感も得て緑に親しみをもってもらおうと、公

園内の森のコースには、小学 1 年生～3 年生には低学年用として 10 種類の樹木が設定され、4 年生以上の子どもたちには 20 種類の樹木が設定されています。また、配布する樹木説明一覧表などは試験会場に持ち込めないものの、メモ書きは持ち込むことができるなど、できるだけ解答しやすい形をとっています。今回のプログラムでは、森のコースの試験樹木を組ごとにインストラクターと一緒に見て回り、帰ってきたグループから試験会場にて試験を受けてもらいました。試験が終了した組は、採点と認定証を待つ間に、葉っぱの遊び体験等のクラフトを楽しんで時間を過ごし、最後に、隣接するパークシアターで草笛音楽隊が「見よ、勇者は帰る」を奏でる中、國安哲郎実行委員会々長からの認定証の授与と記念撮影が行われました。

今回は前述のように親子での受験を試みましたが、いつもだとインストラクターの説明に、緊張気味に耳を傾ける子どもたちですが、親子で一緒にリラックスしながら楽しむ様子も見られ、また試験会場では神妙に親子それぞれが受験する姿もうかがえ、これまでにない雰囲気となりました。授与式の記念撮影ではちょっと照れた感じのお父さんもいて、微笑ましく感じられました。インストラクターからは、「親子で受験ということで説明もよく聴いてくれた」、「受験会場でも子どもの緊張感がほぐれて効果は大である」、「親子との思い出作りにも役立ったと思われる」などの意見が寄せられました。



熱心にメモをとる



親子で試験に挑戦

## 事例 報告 II

札幌市・藻岩山での  
子ども樹木博士活動

株式会社りんゆう観光 立野 祐一

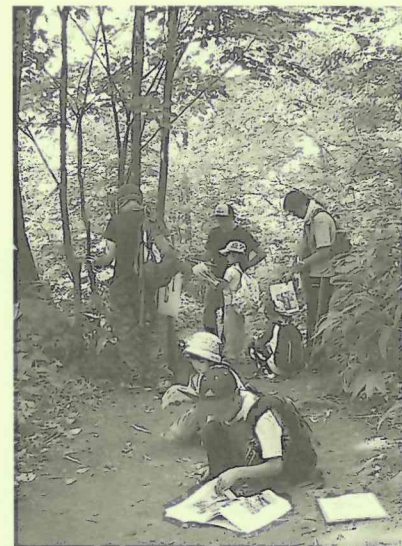
小・中学生が夏休みになる8月初め、札幌市内の藻岩山をフィールドに、自然や森林に親しんでもらいながら樹木の名前や特徴をおぼえてもらい、おぼえた樹木の数に応じて樹木博士としての実力を認定し、「子ども樹木博士」の認定証を交付するイベントを開催しています。

この子ども樹木博士は、普段なかなか触れることのできない自然に触れ合うことにより、藻岩山の自然をはじめ、私たちの身の回りを取り巻く自然環境問題への興味と理解を深めてもらおうと、毎年開催し、今年で8回目になります。

第1回から第5回までは、「藻岩山の魅力を高め、持続させる活動の円滑な運営及び調整を行うこと」を目的に発足した札幌市の藻岩山魅力アップ推進連絡協議会の部会により、藻岩山魅力アップ事業の一環として実施してきました。第6回からは、藻岩山魅力アップ推進連絡協議会の事業運営が、機能強化された藻岩山観光運営委員会に引き継がれたことから、藻岩山観光運営委員会の子ども樹木博士主催担当として実施しており、札幌市と藻岩山を管理している石狩森林管理署のご後援をいただいています。

子ども樹木博士の当日は、集合場所での受付、手製の樹木図鑑の配付、そして登山を開始し、樹木図鑑による樹木の説明と登山道沿いの樹木の観察、お昼頃に藻岩山の山頂に到着し、休憩・昼食で午前の部が終了です。山頂での昼食の後には、ミニケーブルカーとロープウェイを乗り継いで山麓へ下山し、ロープウェイ

山麓駅舎周辺の登山コースとは別の場所で15本(種類)の子ども樹木博士のテストを行い、終了後に解散するという行程です。手製の樹木図鑑は、登山道沿いの30本(種類)の樹木について葉等の写真を掲載したものです。



子ども樹木博士を開催している藻岩山は、札幌市の中心部から30分程のところにある標高531mの山で、市街地に居ながら山の気分が味わえる貴重な場所です。都市の中に豊かな自然が残されている山としては、世界的にも大変珍しい場所だと言われています。札幌市では、5月31日を「藻岩山の日」に設定し、毎年イベントを行っています。

また、藻岩山の山頂から見る札幌市街地の夜景は大変素晴らしいものです。山頂へはロープウェイとミニケーブルカーで登れますが、登山道は5コースあり、それぞれコースの延長距離や周辺の環境は様々で、多様な登山を楽しむことができます。樹木と草花の種類は440種で、野鳥は80種が生息していると言われています。樹種は、ニレノキ、カツラ、シナノキ、オオバボダイジュ、オニグルミ、ハリギリ、キハダ、キタコブシ、ホオノキ、エゾヤマザクラ、ミズナラなど、多くの落葉広葉樹が生育しており、子ども樹木博士の開催には大変適した場所となっています。

子ども樹木博士は親御さんを含め30~60名の参加募集人員ですが、1年に1回の開催で、残念ながら雨天で中止となった年もあり、子ども樹木博士として誕生した人数はまだそれほど多くはありません。これまでに誕生した子ども樹木博士は約70人といったところ です。



# シリーズ

## 東南アジアの木々たち (21)

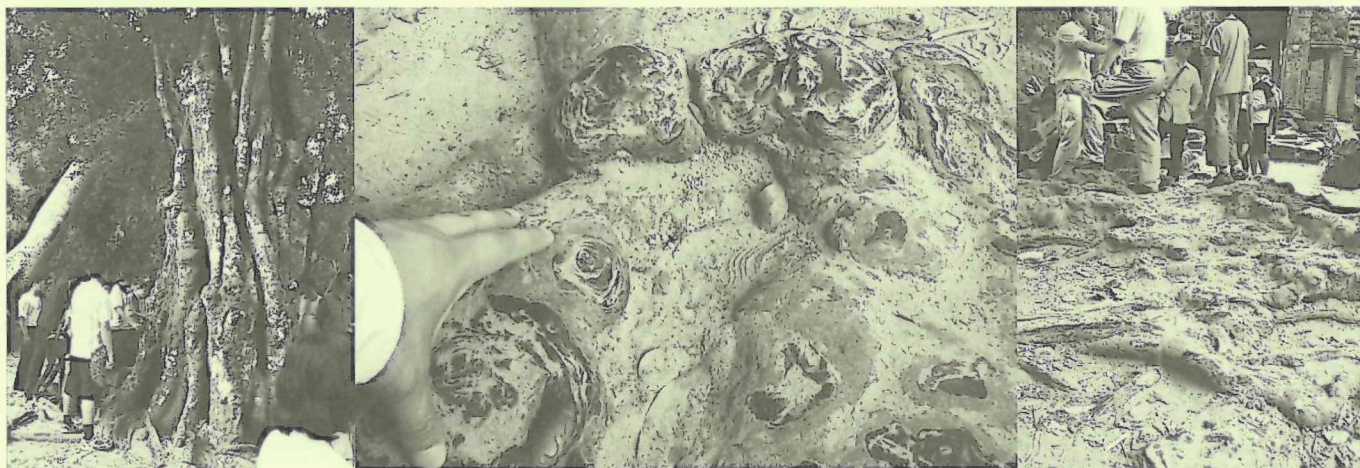
### —真っ黒い石のような木—



自然と植物の観察会 TREECIRCLE 梅本 浩史

前回まで、東南アジアの国々で見られる興味深い「BONSAI (盆栽)」について見てきましたね。今回は、

真っ黒い色をした「石」のように堅い材をもつ熱帯の樹木について、一緒に見てみましょう。



黒檀の大木の「幹」と樹皮が欠損した「露出根」の姿

以前、カンボジアの遺跡を歩いていると、何かに引っ掛かり転びそうになったことがあります。よく足元を見ると、真っ黒で堅く冷たい「木の根っこ」が這っていました。これは「黒檀」と呼ばれる木の根っこ（露出根）だと、すぐに気付きました。

黒檀は、樹高 20 m 程に成長するカキノキ科の常緑高木。成長すると幹に深い縦溝が入り、中には「板根」をもつこともあります。木を輪切りにしてみると、幹の心材（中央部分）の真っ黒な様子がわかります。材質は、非常に緻密で水にも沈みます。皆さんも、実際に黒檀材を持ってみれば、ズシッ…と重たく感じるこ

とと思いますよ。

黒檀という呼び名は「総称」で、実際には沢山の種類があり、その代表的なものは「本黒檀」（真黒）と呼ばれています。また、茶色と黒の縞模様になるものを「縞黒檀」と呼び、バリ島等で見られる「木彫り像」の素材は、この縞黒檀が多く用いられています。

中には緑がかった黒色の「青黒檀」と呼ばれる「幻の木」、「木の宝石」もあります。いずれの黒檀も成長が遅く、各地では乱伐が進んでいるため、多くの国々が伐採や輸出を禁止して保護しています。



黒檀の名で流通する伝統的な民芸品、美術工芸品

# 子ども樹木博士質問コーナー

茨城県植物園緑のインタープリター・森林インストラクター 堀内 孝雄

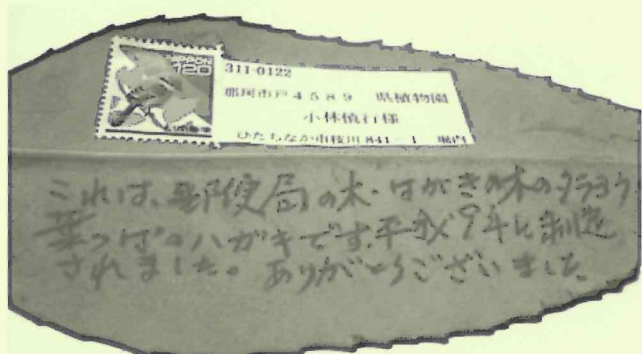


**Q** 葉っぱをはがきとして使うことができる「はがきの木」があるそうですが、それはどんな木でしょうか。

**A** 本州では静岡県以西、四国、九州や中国南部山地の常緑広葉樹林内に生育する、モチノキ科のタラヨウという木です。樹高は10~30 mになり、葉の大きさは長さ10~17 cm、幅6~7 cmの楕円形で、縁に鋭いギザギザ（鋸歯）があります。葉裏は黄緑色で、傷つけると黒く変色するので、インドで葉に経文を書くヤシ科の多羅樹（ワチヤシ）になぞらえてタラヨウと名付けられました。葉の裏を細い棒で引っかくと文字が書けます。これは酸化酵素の作用で、酵素がタンニンに働き色素を生ずるためです。

平成9年(1997年)に、当時の郵政省がタラヨウを「郵便局の木」、「はがきの木」として制定し、各地の郵便局でイメージアップのためのシンボルツリーとして植樹されたと伝えられています。

タラヨウの葉っぱは、はがきとして郵送する場合は定型外ということで120円の切手が必要です。



郵便局の木「タラヨウ」のはがき



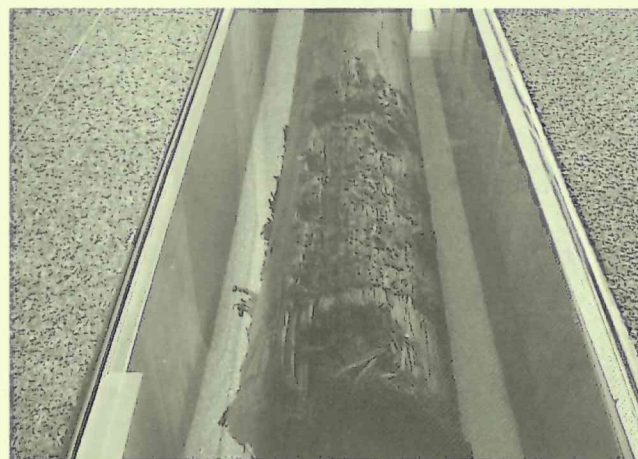
タラヨウ（ひたちなか市）約120年生、目通り直径46 cm、樹高12 m（小和瀬章氏提供（2013.6.18撮影）による。）

**Q** ホームセンターなどで目にする外材のベイマツは日本のマツの仲間ではないようですし、東京の丸ビルの基礎杭として使われていたとも聞きました。ベイマツは一体どのようなマツなのでしょうか。

**A** 外材で米マツと呼ばれるベイマツは最も輸入量の多い外材の一つですから、ホームセンターなどでもよく目にする木材です。日本のアカマツの仲間マツ科マツ属（Pinus）ではなく、日本のトガサワラの仲間（トガサワラ属（Pseudotsuga））です。

この木は、英名でダグラスファー（Douglasfir）やオレゴンパイン（Oregonpine）と呼ばれ、北米大陸のカナダのブリッテシュコロンビア州からカルフォルニア州にかけての太平洋沿岸に分布するマツ科の針葉樹です。相当大きくなり樹高50~70 m、直径3 mほど。時には樹高100 mにもなるといわれます。明治以来メリケンマツと呼ばれてきましたが、本来はアメリカトガサワラと呼ぶべきです。

東京駅やその前にある丸ビルは最近建て替えられましたが、その際、基礎杭として大量のベイマツが出土したことがよく知られています。霞が関の農林水産省も建て替えられた時に多量のベイマツの基礎杭が出土したと伝えられています。ベイマツの木材は木目が美しく日本のアカマツに似ていることからベイマツと呼ばれたものと思われます。なお、ベイマツは日本に最初に持ち込まれた外材です。嘉永6年(1853年)ペリー提督率いる黒船が日本に来た時にベイマツの角材が持ち込まれたと言われています。



建て替えられた丸ビルの地下から出土したベイマツの基礎杭の展示標本（2012.11.21撮影）

# 事務局だより

## 第13回通常総会の開催について（報告）

7月19日（金）、林友ビル（東京都文京区後楽）会議室において、当協議会の第13回通常総会が開催されました。また、これに先だって、第15回役員会が開催されました。

総会では、先ず木平勇吉会長（東京農工大学名誉教授）の開会の挨拶、続いて来賓としてご出席いただいた林野庁森林利用課山村振興・緑化推進室の松本康裕課長補佐からご挨拶をいただきました。

議事では、平成24年度の活動報告及び収支決算報告、平成25年度の活動計画（案）及び収支予算（案）が審議され、承認されました。特に活動計画に関して、3月21日の国際森林デーに関連した取組について提案があり、検討していくこととされました。続いて役員改選が行われ、新しい会長に日本大学生物資源科学部教授の井上公基先生が就任されたほか、役員名簿のとおり選任されました。

総会に引き続いて、特別講演として、東京農業大学森林総合科学科教授の上原巖先生から、「森林療法の現状と今後の可能性—森林療法の誤解をとく—」と題してご講演をいただきました。①森林療法とは何か、②森林療法と森林セラピーとの違い、③各地における森林療法の事例、④森林療法の今後の可能性等について、ユーモアをまじえながら、まさに先生のこれまでのご経験や実践、研究活動を踏まえて分かりやすくお話をいただきました。参加者には大変好評で、出かけてきた甲斐があったとの声がいっぱいでした。

今回の通常総会における活動報告・活動計画等の概要は、次のとおりです。

### ■平成24年度活動報告

- 1) 機関誌「子ども樹木博士ニュース」を6月、9月、12月及び3月の年4回発行・配布
- 2) 認定活動の実施状況（実施団体から事務局に報告等されたもの）
  - ・実施回数で延べ69回、参加人数で延べ約220人（前年度：73回・約230人）
  - ・地域ごとには25都道府県で60団体による実施（前年度：22都道府県・46団体による実施）
- 3) 「認定証」、「認定活動の進め方」、その他の資料等の配布
- 4) 新しい「子ども樹木博士のための樹木ガイド」の普及
- 5) 実施団体等からの要請に応じた森林インストラクター等の紹介
- 6) 「森林からはじまるエコライフ展2012」でのパンフレットの配布、ホームページの更新等

### ■平成25年度の活動計画：前年度とほぼ同様（掲載略）

### ■役員名簿（敬称略）

顧問	箕輪 光博	((公社) 大日本山学会 会長)
会長	井上 公基	(日本大学生物資源科学部 教授)
幹事	木平 勇吉	(東京農工大学 名誉教授)
〃	梶谷 辰哉	((公社) 国土緑化推進機構 専務理事)
〃	中川 重年	(京都学園大学バイオ環境学部 教授)
〃	肱黒 直次	(全国森林組合連合会 専務理事)
〃	堀内 孝雄	(茨城県植物園 緑のインタープリター)
〃	渡辺 政一	((一社) 全国林業改良普及協会 専務理事)
〃	秦野 恭典	((独) 森林総合研究所 研究情報科長)
〃	藤原 敬	((一社) 全国木材組合連合会 常務理事)
〃	宮林 茂幸	(東京農業大学地球環境科学部 教授)
〃	瀬尾 克美	(全国森林インストラクター神奈川会 副会長)
〃	渡辺 直明	(東京農工大学 SF センター 助教)
〃	石島 操	(日本造林協会 副会長)
〃	鳥海 正美	((一社) 日本森林インストラクター協会 事務局長)
事務局長	尾古 孝文	((一社) 全国森林レクリエーション協会 専務理事)
監事	玉川佐久良	((財) 木原営林大和事業財団 監事)
〃	西堀 稔	(三井住友海上火災保険(株) 顧問)



特別講演会の開催状況

## 子ども樹木博士ニュース

2013年9月1日 No.52

### 子ども樹木博士認定活動推進協議会

〒112-0004 東京都文京区後楽1-7-12 林友ビル6階  
 一般社団法人全国森林レクリエーション協会内  
 TEL : 03-5840-7471 FAX : 03-5840-7472  
 E-mail : kodomohakase@shinrinreku.jp  
 URL : <http://www.shinrinreku.jp/kyokai/kodomokyou.html>  
<http://www.shinrinreku.jp/kodomo-n/main.html>